
漢の娘とI Sと

村崎さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漢の娘とISと

【Nコード】

N8773Z

【作者名】

村崎さん

【あらすじ】

織斑一夏は世界で初めてISを動かした事で有名な人間だ。しかし、未だに彼らIS関係者は知らない。もう一人の動かせる男性が、IS学園に潜んでいる事に。

第一話

世界は一変した。^I
インフィニットストラトス^Sが、今迄の世の中を変えていった。

発端は、世界中の軍部がハッキングされ、日本にミサイルが飛来した事件だろう……多分。

迫ってくるミサイルから日本の絶体絶命のピンチを救ったのが、一機のISだった。

全てのミサイルを撃墜するどころか、ISを危険視して派遣された何処かの軍隊も駆逐した紛れもない兵器。

それが初めて、世に晒されたのだ。

この事件は後に……えっと、なんて言ったかな……確か「白騎士事件」と呼ばれる様になった。

そして……えっと……なんか脅された日本が条約結んで……ISが……えっと……。

なんかこう、スポーツに使われる様になったんだっけ。

で、それから……ああそうだ、男尊女卑から女尊男卑になったんだ。何故かと言われるとISは女性にしか動かせないから。

あり得ないほど致命的な欠陥だが、基本性能が高過ぎるので制作者の……篠……篠原？

あれ、長篠？……篠……篠沢博士がそういう設計にした理由もなんとなくわかる気もする。

これが、俺の知ってるIS関係の全て。

世間一般では常識であろう場所が欠落してるのは、

元々欠片も興味が無かったのに三日で詰め込んだからと自己完結し

ておこう。

あ、少し思い出した。

一つは、日本にはIS操縦者育成を目的とした高校がある事。
もう一つは、ISを動かせる男性がもう一人現れた事。

そして最後に。

俺がISという物を通して得た教訓が一つ。

例えどんなに篠なんとかさんが天才だろうが。
例えどんなにISがチートの高性能だろうが。

誤作動
間違いは、必ずあるという事だ。

それに巻き込まれた人からすれば、実にいい迷惑である。

第二話

俺は、男だ。

何処にでもいる、一般的な男子高校生だ。

運動が得意で、勉強が苦手な男性だ。

股間に一本の柱を持つ、誇り高き漢だ。

だった……筈……なんだ……。

春で連想されるものと言えば人それぞれあるが、

少なくとも今の俺にとっては『地獄の宴』だと言えるだろう。

もしかしたら、前の席にいるこの男もそう思ってるかもしれない。

或いはそれ以上か、それ以下か。

少なくとも、今確実に彼の気持ちを代弁するならば一つだけ言える事がある。

大勢の女子に囲まれるというのは、実際経験すると苦痛でしかないと言う事だ。

俺はそう予想して、ぼんやりと窓の向こうを眺め始める。

そう、ここはIS学園。

未来のIS操縦者を育成する為に設立された女の園。

周囲に男は、俺と前の彼しかない。

他は右も左も前も後ろも上も下も生徒も教師も全員女性。

おっと、多少の訂正があるな。

これはあくまで俺の視点だ。

俺……から見れば男は二人だが、彼……から見たら男は一人だけだろう。

なんたって、俺は女装してるんだからな。

(……自分で言ってる恥ずかしいいいいい！)

心の中で絶叫する。

声に出せない気持ちめっちゃくちゃ歯痒い。

全く、どうしてこうなったんだろう……。

「……さん、……さん」

そつだ……元はといえば係員が間違わず、ISが誤作動を起こさなきゃこんな事には……。

「……さん、……さん」

いや、諸悪の根源は面白がってここに入学させる様に準備した父親だ！

次会ったら速攻でIS使って捻り潰す！ むしろ捻り潰す！ 潰し切る！

「小川さん、小川さん！」

「ああ？」

誰かの呼ぶ声に地声で反応する俺。

瞬間、クラスの全員の視線が俺に集まる。

『え……今の何？』と言わんばかりの視線が俺に集中する。

「…………あ」

しまったあああああああああああ！！

地声男の声じゃんかよおおおおおおお！！

やばいやばいやばい！！ 男だつてバレる！！

入学初日から変態だと思われろうろうろう！！

「お、小川さん？ そ、その声はどうしたのかな？」

「あ…………えつと…………」

どう切り抜けるんだ…………この場を乗り切る方法は！？

大体今の状況は！？ 何故俺は名を呼ばれた！？

急いで周囲を見渡す。

…………ああくそ！ ほとんど女だ！

とりあえず声についての言い訳が最優先である事は理解出来た。
えつと、何か有効な言い訳は…………！

「そ、その…………」

…………そうだ！

よくある方法だけど風邪だと誤魔化そう！

俺はあえて声色を変えず、そのまま喋った。

「の、喉を痛めまして…………」

さあ、どうなる！？

「あ、そうだったんだ！ ごめんね？ 体調は平気？」
「え、ええ……ありがとうございます、先生」

教師は疑いもせず、むしろ俺の心配をしてくれた。
俺に向けられた視線も一気に薄れていくのが感じられる。

……突破出来ちゃったよ。教師もクラスもチヨ口過ぎやしないだろうか。

「じゃあ、自己紹介してくれる？ もう君の番なんだよ？」

緑色の髪 of 教師が自己紹介を促す。

ああそうか。初日だから自己紹介してたのか。
なら俺が呼ばれたのも頷けるな。

俺は優雅に立ち上がり、深々とお辞儀して本来の名から少し削った名を告げた。

「小川悠おがわゆうです。悠と呼んでください」

本当は悠介と呼んでほしいところですがね。

「三年間宜しくお願い致します」

俺は深々とお辞儀をし、席に着いた。

よし、品行方正な影の薄い病弱女子っぽく振る舞えたな。

次は女子期待の男性の自己紹介だし、俺の事もそれ程記憶には残らないだろう。

うん、完璧な作戦だ。

「じゃあ次。織斑君」

「……………」

返事が無い。

俺みたいになにか考え事でもしているのだろうか？

「お、織斑君？ 織斑一夏くん？」

「は、はいっ！」

裏返った声が教室に響く。

周囲からはクスクスと笑い声が聞こえてくる。

よくやった、織斑一夏。

これで俺の印象は益々薄らいでいる筈だ！

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい！ お、怒ってる？」

緑髪の教師が慌てた口調でペコペコ頭を下げている。

その仕草を見る限り、年上の女性とは思えない。

数日したら生徒から渾名を付けられて尊敬の念もなくフレンドリーに接せられそうだ。

俺がそんな事を思いながら二人の様子を見てみると、織斑一夏が自己紹介を始め、

「えー…………えつと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

そしてすぐに終えた。

……え、それだけ？

他の人も俺と同じ事を思ったのか、織斑を見つめる視線が強くなる。

俺ですらもう少し喋ったんだからもう少し自分の事を語ったらどうだろうか？

趣味とか特技とか意気込みとか、ちょっと冒険して女性の好みを言うのも面白い。

まあ、俺は絶対やらないけどね。

「以上です」

ガタタツ。そんな音が響く。

首だけで振り向くと、何人かがずっとこけている光景が目に入った。

……さすがにそれはオーバリアクションではないだろうか。

パァンッ！

今度はまるで銃声の様な音が教室を響かせる。

驚いた俺はすぐさま教卓の方に顔を向き直した。

見れば、織斑一夏が黒い服の女性に叩かれていた。

「げえっ、関羽!？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

あ、また叩かれた。

あれは確実に脳細胞持ってかれたな。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

緑髪の……山田教諭が黒スーツの女性と話している。

会話の内容を察するに、どうやら黒スーツの先生、織斑教諭はこのクラスを担当する先生の様だ。

この人、山田教諭と違ってなんか出来る女って感じだなあ。

俺が他愛もない事を頭に浮かべていると、織斑教諭が自己紹介を始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。

逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんとというドS宣言。

一体この教師は何様のつもりなのだろうか。

しかし他の女子は嫌悪感どころか、

「キヤー！ 千冬様よ、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

むしろ幸福そうな声で叫んでいた。実に理解し難い。

ていうか、千冬様？ 先生に、様？
この人は何か有名な先生なのか？

てか？ あれ？ この先生、苗字を織斑って言ってなかったか？

聞き出したいけど、目立つ行動になるのは目に見えていたので
そのまま座って黄色い歓声を聞いていた。

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

駄目だこいつら、早くなんとかしないと……。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。」

それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？

毎年なんだ……出来る女はそれなりの苦勞が付き物のようだ。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

どう聞いてもSMクラブです。本当にありがとうございました。

どうやらこのクラスは変態度において弱冠十五才にして精鋭揃いの
様だ。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

本日三度目の銃声。
早くもクラスの名物になりそうな予感。

「織斑先生と呼べ」

……ああ、やっぱりこの二人姉弟だったのか。
織斑なんて珍しい苗字で他人な訳無いよな。

鈴木や佐藤、俺の苗字や山田とかありふれた苗字なら話は別だが。

「え……？ 織斑君ってあの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

唯一という単語が聞こえた時、俺は少し微笑んだ。
やっぱりバれてないんだなと安心する事ができた。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。」

その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。
いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

織斑教諭がまた女子のM心を撥る様な発言をする。
それによってまた黄色い歓声が上がることは無かったが、
織斑一夏の方は姉の発言に驚愕していた。

(……………)

まだ初日は始まったばかり。

早く帰りたいという心の弦きは、
チャイムの音で掻き消されたよう
な気がした。

第三話（前書き）

これは波紋を呼ぶなあ……

第三話

授業が始まって、クラスの視線は織斑一夏に向けられていた。

休み時間になっても、クラスの視線は織斑一夏に向けられていた。

誰も、俺に話しかけようとしなない。

(状況的には嬉しいんだけどな……)

何かこう、モヤっとするものがある。

やはり友達の一人や二人くらい欲しいのだろうか。

(でも無理だよなあ……)

女装してるのが暴露たら、織斑一夏の二の舞だし。

ぶらり研究所巡りの旅直行ルートだし。

(……諦めるか)

特徴を消して、空気に溶け込み、記録に残れど記憶には残さない。

そうしてこの三年間、俺は生きていかなきゃならないんだから。

だから、友達とかそんなのに縋るのは辞めよう。

クラスメイトは赤の他人なんだから。

俺は決意を新たに、女子トイレの個室から出た。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

教室に戻つてくると、金髪で縦ロールの髪型の女子が織斑一夏に話しかけているのが見えた。

見るからに外国人だというのに、その日本語は流暢だ。

「まあ！ なんですの、そのお返事。

わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

先程から高飛車に語る金髪ロールさん。

なんかこう、友達にはなれないな。

まあ敵にもならないと思うが……。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？」

イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

金髪ロール……セシリアさんが高飛車に喋る。

この人、クラスで仲良くやってけるのかなあ……。他人事ながら、心配になる。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。

会話を聞き耳を立てていたクラスメイトがずっこけた。

よく見ると、さっきもこけてたメンバーだ。

お前ら大阪のコントかよと突っ込みたくなっただけど堪えた。

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。」

……あなた、単語から想像すればわかるでしょう？」

……想像してもわからなかった。

あー、基本知識が不足しているところなるのか。しっかり勉強しないと……。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間関係とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……。」

幸運なのよ。その現実をもう少し理解してただける？」

いやそれ全くの無関係だから。

突っ込みたいけど目立ちたくないので堪えた。

あれ？ まさかこれが三年間続くの？

絶対に突っ込みじゃいけない学園生活三年間？

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてよくってよ。」

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

入試…… ああ、あの戦闘か。
打鉄で突進したのはいい思い出。

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」
「は……？」

……読めた。
女では唯一とかそんな才子だ。

てか、織斑さんは女性相手に本気出して勝ったのか。
まさに外道。

そんなこんなで会話を聞いていると、三時間目のチャイムが鳴った。

「っ……またあとで来ますわ！ 逃げないことね！ よくって!？」

セシリアさんはやられ役な台詞を吐いて、席へ戻っていった。

「それではこの時間では実践で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目の授業。
今教壇に立っているのは山田教諭ではなく、みんな大好き織斑教諭だ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表者……聞くだけで面倒な役職だとわかるな。

「はいっ織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

……やっぱり唯一男だと、白羽の矢が立つよね。
初めて女装していて良かったと思う。

「お、俺!？」

うん、お前。

立ち上がって反論しようとお前だ。

現実是非情である。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

突然甲高い声が響く。

見ると、セシリアさんが立ち上がって抗議していた。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらし?？」

……また始まったよ、高飛車演説。

素直に自分が代表になりたいって言えばいいのに。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはならないこと
自体、

わたくしにとっては耐え難い苦痛で??？」

ブチッ！

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

あ、ハモった。

いやいや、そうじゃなくて。

「なっ……！？ えっ……？！」

金髪ロールが激昂しながら驚愕する。
周りの女子も、俺に視線を向けていた。

「お、織斑君、代表候補生に喧嘩売っちゃったよ……」
「ていうかそれよりも今、小川さんも何か言わなかった……？」
「二人とも怖いもの知らずね……」

……どうして俺は決意を新たにしたらってのに、速攻で状況を崩すかなあ……。
仕方ない、すぐに謝って許してもらおう。

「あ、貴方達ねえ！ 祖国を馬鹿にしますの！？」

……それ、てめえが言えた事か？

俺は無言で立ち上がり、セシリアさんの方を向く。

「ひとつ、いいですか？」

「な、なんですか？」

セシリアさんの視線が俺へ向く。
織斑さんも、クラスの他の人も、先生も。
全員が俺を注目している。

「スー……ハ……」

俺は大げさに深呼吸をした。

……よし。

「最初に日本の事を文化的に後進的だと言ったのは貴女ですよ？
それを棚に上げて私達を怒るんですか？ それはまあ随分と神経
が太い事で。」

もしかしてそれもイギリスのお国柄ですか？
郷土料理が不味いだけじゃなくて人格もマズいんですか？ それ
ともあれですか？

国ではなくてオルコットさんの家柄でしょうか？
だとしたら貴女の母親は貴女に立派な教育をしたんでしょうね。
威張ってばかりで自分がされて嫌な事を平気で他人にする
無神経な人として欠陥を抱えた人に育て上げるなんて、頭がまとも
な人には難しいですよ。

良かったですね、酷い国に生まれて酷い親に育てられて」

全員が、信じられないものを見るような眼で俺を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8773z/>

漢の娘とISと

2012年1月4日10時50分発行